グラフィックデザイン界の最前線で、常にコミュニケーションデザインの本質を見つめ続ける。

—先生は本学芸術学部デザイン学科のご出身ですが、最初にグラフィックデザイナーを志したきっかけをお聞かせください。

幼い頃から暇があれば絵を描いていました。印刷物が好きで、網点や版ズレを見てはワクワクする変わった子供だったんです（笑）。当時はマンガ家に憧れていましたが、今思うと、自分の創ったものを印刷されたいという気持ちの表れでしたね。小学生の頃には学級新聞を制作したりしました。文字や絵、レイアウト、段組みまで、自分一人で全部作るのが楽しくてしょうがなかった。これが私のデザインの原点です。中学時代からは、当時の風潮もあって音楽に夢中になりましたが、大学進学を考えるにあたり、初めてグラフィックデザイナーという職業を意識しました。好きで得意なものというだけでなく、自分の力で人生を創造していける自由さを感じて、デザインという進路を選択したのです。

学生時代は勉強や課題制作にも真剣に取り組みながら、軽音楽部でバンド活動にも熱中。ビジュアルだけでなく音楽にも傾倒したことで、直観力や瞬発力が鍛えられましたね。音楽とデザインは、どちらも時代を映すライブなものであり、バランスを考えながら構築していく点も似ていて、得るものが多かったと思います。また多感なこの時期に、様々な人間が集まる大阪芸大で色々な刺激を受けることができたのも貴重な経験となりました。

小学3年生で自主制作クラスで配ったガリ版刷の学級新聞。デザインという言葉や概念も知らないままに創りあげた、自身の初のデザイン

—関西のデザイン界をリードし続け、40年以上プロとして活躍される教授にとって、最大の転機は何だったのでしょう。

卒業してグラフィックデザイナーになってからは、毎日徹夜続きのハードな日々でした。当時はコピー機すらなく、何もかもが手作業。0.1ミリにこだわりながら一つひとつの工程を手で行うことで、デザインの身体感覚が養われたのだと思います。30歳でデザイン事務所を設立し、広告制作の仕事に打ち込んでいた頃、マッキントッシュと出会いました。これが私にとって実にエポックメーキングな出来事となったのです。白い画面に浮かぶ文字や絵を見て、これは紙の延長であり、デザイナーの敵ではなく味方であると直感。アナログとデジタルが自分の中でつながり、大切なのは紙の上の表現でなくコンテンツであると気づきました。制作スピードも一気に上がって、デザインの本質について深く考えるようになり。いち早くデジタル環境を整備し、マスメディア広告からブランディングなどを含むコミュニケーションデザイン全体へと移行していきました。

—デザイナーとしての信条を教えてください。

デザインは、名刺のように小さなものから都市計画のように大きなものまで、人間の生活全般に関わっています。デザインの力で、人の暮らしをより良く、より楽しく、もっと便利で豊かなものにできると信じて、多様な仕事に取り組んできました。その中で見えてきたのが「デザインは情報の設計と印象の設計である」という考え方。意識的な理解を頭に届ける「情報」と、無意識の部分に働きかけて心に響かせる「印象」。これは「理性と感性」と言ってもいいでしょうし、「サイエンスとアート」に置き換えられるかもしれません。そ

の両方を同時に設計してこそ、真のコミュニケーションデザインが成立します。論理的に一から組み立てるデザインもあれば、直観的にひらめいたアイデアに論理を復元していくデザインもありますが、どちらもデザイナー自身が自らの経験や記憶を積み重ね、五感を鍛えてこそ生みだせるもので、どう伝えるかではなくどう伝わるかを常に考え、ディテールや表面的な見た目にとらわれすぎることなく本質を追求し続ける。それがデザイナーの役割だと考えています。

—タイポグラフィをフィーチャーした作品も多数手掛けられていますが、「文字」を重視されるのはどうしてでしょうか。

日本語の文字は、日本人のアイデンティティの根源であり、グラフィックデザインの最も重要な要素であると考えています。文字は、言葉の意味と音を形にしたものですが、一方で形や太さ、大きさ、字の間隔などによって、表情が様々に変わるように、その双方の要素を捉えることが、タイポグラフィの理解につながります。タイポグラフィは、言わばコミュニケーションデザインの基礎体力で、タイポグラフィができる人はそのままグラフィックデザイナーになれると言っても過言ではないでしょう。

—作品発表や後進の指導にも力を入れておられます。

企業から受注する仕事と並行して、個展や展覧会で実験的な作品を発表することにも力を注いできました。世界的なポスターコンペで評価されたり、国際デザイン団体の会議や講演、ワークショップ等に招かれたりと、海外を訪れる機会も増えました。また本学の教員となってからは、次代のデザイン界を支える人材の育成も大きな責務と考えています。与えられた課題をクリアし答えを提供するビジネス。自分の思考やアイデアを形にして発信する展覧会やコンペ。そしてデザイナーとしての体験から培われた「暗黙知」を「形式知」として伝え、社会に貢献していく教育。それぞれを深くリンクさせながら、デザインの力を広めていけたらと思っています。

—デザイナーをめざす学生たちに、エールをお願いします。

デザインに興味を持ち、本学で学ぼうという人には、それだけですでに隠れた才能があると言えます。それを磨くのが教育であり、一人ひとりの才能を開花させるのは私たち教員の役割です。ぜひ自信を持って、前向きに努力してください。感性やスキルは日常の中でも磨けます。たとえば、身の回りに無数にあるデザインに目を留めてみる。コンビニのお菓子一つとっても、ネーミングやロゴ、文字や配色、シズル、商品情報と様々な要素が込められていますから、自分なりに観察・分析してみてください。

何よりも心に刻んで欲しいのは、デザイナーは嘘をついてはいけないということ。より伝わりやすくするために様々な手法は使いますが、事実をねじまげては意味がない。表面にとらわれず、常に本質を意識するという姿勢を忘れないでください。